むなかた

霜月（しもつき） 第681・特別号

目次

天皇・皇后両陛下御参拝 2~5
海の鎮守の森基金創設・造営日記 6
国宝・奈良三彩小壺を復元 奉納 7
秋季大祭斎行 8
沖ノ島祭祀 9
神宝館だより・西日本菊花大会 10
宗像大社歌会詠草 11
御造営奉賛者御芳名 11

よてす。近年、海の環境変化は著しい。そのため宗像では四年前より宗像国際環境一〇〇人会議を立ち上げ、海の再生を実践している。そのような中、全国豊かな海づくり大会が宗像市で開催された。この大会は、天皇陛下が皇太子時代から出席され、陛下の御研究や御言葉などからもその御関心の高さが拝察できる。しかし、その海が目に見える形で変化している。昨夏の玄界灘の海水温度は三十度まで上昇。沖ノ島ではサンゴが広がり南方の魚が生息、磯焼けも各所で散見されるようになった。今日の海の問題は誰しも理解できるが、三十六年前から取り組まれている陛下の先見性は、只々敬服の至りである。さらに、皇后陛下には、行幸啓に先立つ八十三歳の御誕生日に、マイクロプラスチックと魚の問題にまで言及されている。環境問題は全て人類が招いたことである。私たちは地球の七割を占める海の実態を把握し、一刻も早く海の再生に取り組み、危機的状況を改めなければならない。

天皇・皇后両陛下御参拝

奉助天孫而
為天孫所祭

宗像大神には、歴代天皇をお助けすれば、歴代天皇からお祭り戴けるとの神勅（『日本書紀』七二〇年）、この天皇の皇祖神である天照大神からの御言葉が今も大切に引き継がれている。そして、平成二十九年十月二十九日、有史以来、初めて、天皇皇后両陛下よりの御参拝を賜った。

当日は台風の影響で天候も心配されたが、空は晴れわたり、拝殿に降り注ぐ西日は神勅の扁額を照らし、両陛下はその光に導かれるように参道を進まれ、立玉串を捧げられた。

神勅が結実された瞬間を目の当りにした参列者たちは、歴史的な場面を共有できた喜び、中には感動のあまり涙を浮かべる人々も少なくなかった。

宗像大社では、十月二十九日の記念すべき日を「豊饒祭」という祭日とし、豊かな海、山、川、田畑を願う恒例祭として後世に伝えることとした。

○　○　○

この度の行幸啓は、第三十七回全国豊かな海づくり大会福岡大会が宗像市で開催されることとなり実現したものであるが、七月五日に発生した九州北部豪雨による被災地も見舞われることとなり、十月二十七日より三十日の四日間の御滞在となった。

天皇皇后両陛下には、二十九日、第三十七回全国豊かな海づくり大会福岡大会に御台臨の後、鐘崎漁港の放流行事が天候の影響で取りやめとなり、予定より早い十四時五十分、御料車にて勅使館前に御着。境内に集まった三〇〇名の奉迎を受けられ、勅使館にて御休憩の後、葦津宮司の先導により勅使館より本殿に進まれ、御拝礼された。

その後、勅使館「饗膳の間」にて沖ノ島の古代祭祀の奉献品（内行八花文鏡、勾玉、棗玉、臼玉、ガラス製玉類、鉄剣、鉄刀、鉄地銀張鏃、水晶製三輪玉、切子玉、鉄芯銀張捩り環頭、金銅製龍頭一対、奈良三彩小壺）を御覧。これに先立ち、葦津宮司より宗像の歴史、世界文化遺産登録までの経緯を御説明したところ、特に世界遺産登録にあたっての「スピリチュアル」「アニミズム」「エコロジー」のキー

天皇皇后両陛下御参拝　御日程

14時50分	勅使館前御着
14時53分	御休憩
15時15分	勅使館御発
15時18分	御参拝
15時35分	御休憩
15時39分	応接室御発
15時40分	沖ノ島出土国宝御覧（饗膳室）
15時59分	饗膳室御発
16時00分	御休憩
16時24分	勅使館御発

特別奉送迎者

松尾　新吾
石原　進
長尾　亜夫
出光　芳秀
海老　敏幸
川崎　隆生
寺島　俊基
河辺　紘
安永　治允
福田　伸孝
出光　昭介
麻生　泰
伊東信一郎
二橋　岩雄
鍋島　英幸
松石　偵己
島田　隆士
麻生　渡
吉田　益美
置鮎玄二郎
沖西　敏明
倉元　亮兒
松井　善徳
太田　可愛
髙向　正秀

ワードに御感心を寄せられ、世界遺産登録の御祝意も賜わった。

奉献品については、陛下は精巧な技術に感嘆され、今日までの保存についての労いの御言葉もあり、宮司は研究者の協力を得て歴史をさらに解明したいとお答えした。また、饗膳室に飾られた西日本菊花大会の盆栽菊も鑑賞された。

十六時二十四分、御料車にて勅使館前を御発。これに先立ち、谷井宗像市長、花田宗像市議会議長が玄関前にて挨拶の後、特別奉送に立った職員にも労いの御言葉を賜った。境内の外では約五千人を超える人々が沿道で国旗小旗を振る姿に、両陛下は御料車から各所で丁寧に応えられ、お心遣いの余韻はその後もさめることがなかった。

宗像大社を後にされた両陛下は北九州市の御宿に戻られ、福岡最後の夜を過ごされたが、周辺には約一万二千人の県民、さらにユネスコ無形文化遺産となった戸畑祇園大山笠も加わり、提灯行列が行われた。両陛下はお宿の窓から提灯を振って応えられ、感謝の御言葉が参加者に伝えられると、周辺から歓喜の声が響き渡った。

末筆ながら、この日を願い続けてこられた先達たちをはじめ、御尽力戴いた関係各位に心から感謝申し上げたい。

天皇・皇后両陛下御参拝

第三十七回全国豊かな海づくり大会福岡大会記念事業

「海の鎮守の森」基金創設

―宗像国際環境一〇〇人会議―

宗像国際環境一〇〇人会議では、このたびの全国豊かな海づくり大会を記念して、海を再生させるための竹漁礁づくりをはじめ、広く海に関心を寄せてもらうため「海の鎮守の森基金」募金箱が作成された。

十月二十五日、当日は実行委員会メンバーに地元の高校生や巫女なども加わり、約三十人が当社に集まり募金箱づくりが行なわれた。素材は前日に福岡県立水産高校の生徒等が山から切り出した竹を使用し、節を挟んで切り、お金を入れる穴を開け、最後にステッカーを貼り、約五十個の竹の募金箱を完成させた。

完成した募金箱は、当社をはじめ公共施設や協賛企業などに来年の夏まで目標額を決めず設置し、海の再生事業に活用される。また、募金箱として使用した竹は、竹短冊にして願いごとを書き、来夏に予定される第五回宗像国際環境一〇〇人会議にて竹漁礁と一緒に海に沈められる予定になっている。

今後も随時、募金箱を作成し、多くの人に海の環境再生の協力を呼びかけていく。

宗像国際環境一〇〇人会議
munakata-eco100.net

時満ちて道ひらく

造営日記 37

～勅使館竣工～

清めの雨降る十月六日、勅使館竣工祭が執り行われ、設計監理の種村強建築設計・施工の溝江建設株式会社をはじめ建設に携わった業者の方々のご参列のもと、午前十一時より斎行された。

以前の建物は昭和四十六年に勅使のご参向に併せ建設され、その後貴賓館として使用していたが、新たな建物も主に参拝される方の接遇の施設として用いられる。

饗膳室

第十四代中里太郎右衛門氏

国宝・奈良三彩小壺を復元　奉納

十月十八日、唐津焼を受継ぐ第十四代中里太郎右衛門氏が、約二年に亘って復元した奈良三彩小壺三口が奉納された。

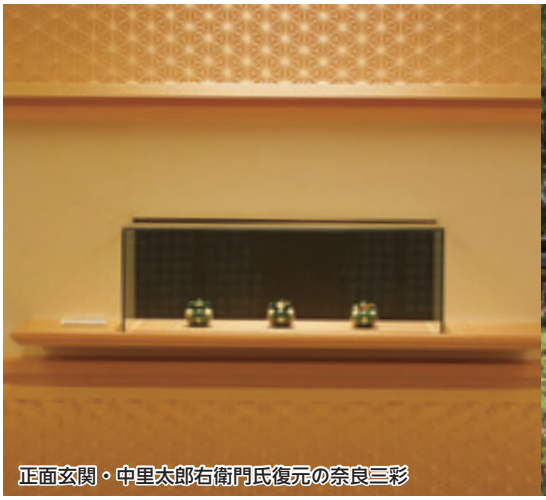
当日は夫人の夕起子氏を伴い来社。マスコミの取材を受けた後、本殿で奉納式に臨まれた。修祓、祝詞奏上の後、三方に載せられた三口の小壺が、当代によって拝殿前部に進められ、奉仕神職によって大前へ捧げられた。

今回の奉納は、神宝館の国宝・奈良三彩小壺をご覧になられたことがきっかけに復元の運びとなり、約二年という長い歳月をかけて奉納された。

この間、白地をだすために奈良の土と唐津の白い土を混ぜたり、唐三彩を焼いた中国洛陽の窯元まで訪ねて、風合いを出すために薪を用いた「のぼり窯」で焼くなど、試行錯誤が繰り返された。

奉納品は六十口の中から釉薬に気泡のないものを三口厳選され、千三百年前に沖ノ島や大島で奉納された当時の輝きを彷彿とさせる見事な奈良三彩小壺となった。

緑と褐色、白の三色が鮮やかに仕上がった三口の奈良三彩小壺は、天皇皇后両陛下をお迎えする「勅使館」正面玄関に展示されている。



正面玄関・中里太郎右衛門氏復元の奈良三彩

秋季大祭斎行

秋季大祭（十月一～三日）。例祭の二日は雨に見舞われたものの、一日の陸上神幸では初の試みとなる神輿での入御も無事行なわれ、三日間に亘り多くの参拝者のもと恙無く執り行われた。

一日のみあれ祭は約二百隻の漁船が奉仕船団を編成、大島より神湊まで勇壮な御神幸を繰り広げた。この模様を一目見ようと五月松原から江口、神湊までの海岸線には多くの方々が詰めかけた。引続き神湊より玄海コミュニティセンターまで神輿を自動車に載せて御動座、同センターより辺津宮神前までは、初めて神輿を担いでの入御が執り行なわれた。

本年より、全長十二キロの御神幸を宗像市消防団始め協力企業等総勢百二十名余の方々に担いで頂いた。三基の神輿を四交代で奉仕し、第一鳥居からは氏子青年会の奉仕により宮入りがされた。ここに御奉仕の方々を始め協力頂いた関連各機関の方々に厚く御礼を申し上げたい。また、入御祭では、主基地方風俗舞が奉奏され一日目を終えた。

二日は、早朝に流鏑馬神事の奉納、例祭では宮地嶽神社献幣使と共に赤嶺和幸氏が氏子奉幣使をつとめ、能楽喜多流による翁舞が奉奏された。

三日は、総社祭を斎行、玄海中学校女子中学生による浦安舞を奉奏。引続き高宮、第二宮第三宮、宗像護国神社にそれぞれ神職が赴き祭典を奉仕した。

秋季大祭の締めくくりとして高宮神奈備祭を斎行、多くの参列がある中、浄闇の中、悠久舞を奉奏し三日に亘る辺津宮の大祭を終えた。

陸上神幸

入御祭

高宮神奈備祭

沖ノ島祭祀 3

――沖ノ島祭祀の起源――

國學院大學　神道文化学部教授　笹生 衛

玄界灘の孤島、宗像沖ノ島。そこでの人間活動の歴史は縄文時代前期（約六〇〇〇年前）に遡る。沖ノ島の発掘調査では、縄文時代から弥生時代の土器が一定量出土している。多くの人々が、この玄界灘の孤島を訪れていたのだ。この島で獲ることができた、豊かな海の幸が目的だったのだろう。だから、海の幸を恵む島の働きに「神」に近い存在を感じ、信仰の対象としていた可能性は高い。ただ、その時代の祭りの痕跡は、特定しにくいのが現状である。

ところが、古墳時代、四世紀後半になると、多量の貴重な品々を供えた神祭りの痕跡「祭祀遺跡」が明確となり、平安時代の一〇世紀初頭頃まで連綿と受けつがれていく。古代の神祭りの跡が残るのは、沖ノ島の南側、標高八〇メートルほどの地点である。ここには、島を形づくる岩石（石英斑岩）の白い巨岩が累々と重なる。高さは一〇メートルに達するものもある。この直下には、沖ノ島で唯一、船を付けることができる港が位置し、真水が湧いている。古代、船で沖ノ島に渡った人々は、島の南斜面、船着場の上にそびえる白い巨岩群に、この島の神を感じたのだろう。

沖ノ島の神祭りが本格化する四世紀後半という時代は、東アジアの情勢が大きく変化した時代であった。四世紀、中国大陸では統一帝国の晋が衰退・滅亡し、朝鮮半島では北部の高句麗が南部の百済・新羅に圧力を加え、不安定な情勢となっていた。日本列島では、三世紀、大和地域（奈良県）を中心に、日本国家の原形「倭国」が成立、四世紀後半には、高句麗の圧力を受けた朝鮮半島南部と倭国との間で、それまで以上に活発な交流が行われ始めていた。沖ノ島で本格的な神祭りが始まるのは、まさに、この時期である。倭国の中心、大和地域から朝鮮半島南部へいたる最短の航路に沖ノ島は位置する。そこでの神祭りは、四・五世紀の東アジア情勢と密接に関係していたのである。

沖ノ島の祭祀遺跡で最古のものは、巨岩群の最も高い部分に残されている。第一六号遺跡・第一七号遺跡・第一八号遺跡は、その代表格だ。直径が二七センチ以上にもなる巨大な銅鏡、緑色の石で作られた腕輪、緑色に輝く翡翠の勾玉、多数の刀剣類など、豊富な品々が、巨岩周辺に納められていた。それは、四世紀、大和地域で貴人の墓「古墳」に納められた品々と共通する。当時、最も貴重な品々が、沖ノ島の神へと捧げられ、神を象徴する巨岩へと納められたと考えられる。

17号遺跡出土の銅鏡「鳥文縁方格規矩鏡」（直径27.1cm）

神宝館だより 8
八万点ノ国宝収蔵

【紙に書かない古文書1】

神宝館の文献史料を紹介する小欄であるが、実は文字は紙に書かれるとは限らない。例えば、阿弥陀経石。

阿弥陀経石は、「平家物語」の中で信心深く理想的な人物に描かれる平重盛が、中国に砂金を寄進した答礼として送られたが、時既に平家滅亡後であり、やむなく宗像に留められたという渡来説話をまとう。しかしながら、経石に彫られた銘文＝文字が歴史的事実を語る。文字に解き明かされる歴史を紐解こう。

笠石と板状の本体と礎石からなる全高約一五〇㎝の石造物で、本体の一面に阿弥陀仏坐像、もう一面に阿弥陀経が彫られている。制作地は中国南宋、年代は大宋紹熙六年、日本年号建久六年（一一九五）。注文主は宗像大宮司氏国で、その意図は、亡くなった父親氏実の供養と社内・一族の現世安穏・極楽往生を願うものである。氏実は当時、隆盛を誇っていた貿易都市博多に居留していた南宋商人王氏の娘を妻に迎えており、彼女が氏国の母親であった。氏国は母の助言、出自の縁から阿弥陀経石を南宋に求めて取寄せたのである。

氏国には氏忠という弟があり、彼もまた南宋商人張氏の娘を妻とした。張氏の娘は氏忠に先立たれた後も宗像を離れることなく、分け与えられた領地も所有していた。彼女は、亡くなった舅姑（氏実・王氏娘）、夫の菩提を弔うために、阿弥陀経石に領地の中から土地を寄進している。経石に捧げる花・灯明・香を賄う費用を捻出するためであった。

宗像大宮司家の南宋との物質的な貿易にとどまらない、人と人とが心でつながる深い交流のありさまが具体的によみがえるのである。（河）

阿弥陀経石

西日本菊花大会開幕

昭和四十六年、昭和の大造営を記念して始められ、今年で四十七回を数える西日本菊花大会。境内は九州各県・山口の菊愛好家が丹精込めて育てた約二千鉢の菊花が展示されます。宗像の秋を彩る菊花展、是非ご覧下さい。

◆会期　平成二十九年十一月一日～二十二日
◆時間　九時～十七時
◆会場　宗像大社境内
◆入場　無料

第675回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

山椿咲きては散りぬ半世紀背高巨木庭を見降ろす　秋吉　嘉範

作者の山椿への思いが見える歌。二句〈花咲き散りて〉四句〈巨木に育ち〉としては。

青年の顔となりたる初男孫ほれぼれと見る長く生きたき　北野カズミ

青年らしく育った孫に頼もしさと愛おしさを感じる作者。結句は〈生きたし〉に。

地の結ぶ絆は断たれ幾条の絆へとかわる故郷の血は　早川　祥三

地縁・血縁が薄くなる現在の傾向だが、親族が離れ住むことを寂しく思う作者だろう。

もしかして巫女さんたちも世界遺産？みどりの楢を冠として　山﨑　公俊

作者は沖ノ島と関連遺産の世界遺産登録を祝い楽しんでいる。四句〈～の楢の葉〉に。

われの死はいかなる形でくるなぞむ田の畦分ち彼岸花さく　豊田ミツ子

今はまだ未来の死を、不安と興味を交えて想像する作者だろう。三句は〈来るならん〉」。

川添いの稲田広がる宮若に三度目の苗箱ハウスに満てり　萩原　勉

よくハウスの中の農作業を見ている作者。初句は〈川添いに〉と助詞を変えたい。

オクラの実雨にてひと日見らぬうち中指よりも長くなりたり　佐々木和彦

植物の成長への感動がよく表れ、長さの具体が効いている。三句は〈見ぬうちに〉。

遠き日を偲ぶ勝浦の白砂の松の木そよぐ風の音して　上妻　真次

美しい景なのだが遠き日とはいつのことだろう、あと少し具体があればと惜しまれる。

ひと夏の暑さに堪へし百日紅庭の木の間に彩りを添ゆ　森　龍子

初秋の百日紅、作者も一息ついたような静かな歌。結句は〈花の色添ゆ〉でも良い。

かかしさえまどろむ間なく次々と稲刈り進む市街地の田よ　本田エリナ

市街地で進む稲刈り。その活気を案山子で表現した歌。結句は〈～は〉と留めたい。

ポストまで手紙を出しに出かければ二匹の猫は付いて歩きし　大和美由紀

作者と猫達の仲のよさが微笑ましい。三句以下〈行くわれに～猫がまつわり付き来〉と。

採りし子がばあちゃんはなと彼岸花オ、アリガタシとすぐみ佛に　山本　静子

子との会話を使い素直に詠んだ歌。子の言葉を括弧に入れると分かり易くなるだろう。

◆選者詠

祖父の家おもへばうかぶお下がりの
叔母の四つ身の萩の花がら
わが眼には陽にかがやける紅葉が
いたく控へ目カメラで撮れば

第648回　俳句

灯籠の「よへほ」かげろう盆浴衣　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（平成二十九年九月）（順不同・敬称略）

二〇〇、〇〇〇円
宗像市　古賀　智己

一〇〇、〇〇〇円
北九州市　竹田　早希
北九州市　竹田　春美
福岡市　福岡広告協会
宗像市　嶺　俊光

三〇、〇〇〇円
金沢市　梶谷　晋弘・眞理

一〇、〇〇〇円
我孫子市　宗岡　恒雄
生駒市　渡部　一博
名古屋市　安田　聡史
日高郡　森　徹
福岡市　河野　光明
八千代市　一條　洋人

六、〇〇〇円
糸島市　国分　一美・浩一

五、〇〇〇円
荒川区　夏野　苺
出雲市　勝部　利男
市川市　志村　修
浦安市　石原　秀之
京都市　土田　祐子
京都市　前田　大介
古賀市　野呂　克吏
さいたま市　宗像　努
杉並区　國定　利浩
世田谷区　田代　真弓
世田谷区　戸井田克彦
世田谷区　入江さやか
たつの市　姫田　耕道
福岡市　松岡　三貴
松浦市　山村　一賀
港区　津村　実佳
宮若市　森　竜一
宗像市　福島みゆき
宗像市　吉田　一直
山口市　藤本　克児
横浜市　村上　有

三、五八〇円
横浜市　脇田　健一

三、〇〇〇円
足立区　俵　澄江
荒川区　藤田　和彦
茨木市　井上かよの
大阪市　福地　昭義
北九州市　梅田　正壽
福岡市　井上　康博
ふじみ野市　玉城　康子

二、〇〇〇円
一関市　熊谷　冗
大阪市　三木　慶子
岡山市　米田誠一郎
川崎市　原　恵里
北九州市　佐藤たかの
播磨　平塚　勝
神戸市　北浦きし子
相模原市　塚本　純子
立川市　伊藤　正明
調布市　中島　由子
津山市　田中　重穂
豊田市　中川　邦子
中野区　森本　文子
名古屋市　佐原　元恵
広島市　武田　博
広島市　橋本　リエ
福岡市　河邉　光臣
福岡市　伊関　豊明
福山市　清水八十八
富士市　成田　寿子
松戸市　阿部　達宣
松山市　一色　剛志
目黒区　佐藤　信子
盛岡市　小田　淳一

むなかた
霜月（しもつき） 第681・特別号 2017年11月1日発行(月刊)／宗像大社 〒811―3505 福岡県宗像市田島2331 電話(0940)62―1311(代) http://www.munakata-taisha.or.jp/

11月 まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭 宗像護国神社祭	午前11時
3日	明治祭	午前10時
15日	総社月次祭併七五三祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時
23日	新嘗祭	午前11時

編集後記

▼人生の節目には必ずと言っていいほど、神社での神事が関わっている▼初詣、節分、初宮参り、七五三・・・秋には特に七五三詣でお参りに来る方が多い▼お子さんの成長を神様にお見せし、今後のご加護を祈念する、そんな七五三詣で賑わい、境内は菊花が咲き誇るなか、様々な子どもたちを見る▼おめかししたまま眠ってる子、泣いてしまう子、恥ずかしそうにしている子・・・▼どんな子どももかわいいが、健やかな成長を願う思いを私達は背中に受け、ご神前で奉仕していることを忘れてはいけない。（黒）

宗像大社